『虞美人草』文学論と戯作法

Junko Higasa

職業作家：夏目漱石の初新聞長編小説『虞美人草』は、楽しくも恐ろしい物語である。漱石自身が「力が入り過ぎた」と自覚しているように、この作品は単なる知識の表面的お披露目ではなく、根底に知識が川のように組み込まれ、複雑に交差している。

まず叡山と富士山にまつわる神話知識と国の体制における国民の生活知識が必要となる。次に伝教大師に表される天皇と宗教の関わりと、桓武天皇、天智天皇、天武天皇、源平合戦、産業革命の知識が必要となる。そこへ持ってきてそのベースにはシェイクスピアの「アントニーとクレオパトラ」「ハムレット」「マクベス」が入る。それらをヴィクトリア朝の豪華絢爛な文体と、レオナルド・ダ・ヴィンチのスフマート技法による色の表現で綴っているのだから、大変なものである。しかもシェイクスピア作品が原語で理解できるうえに、英詩のミュージックも感受できなければ書けない内容となっている。通訳タイプの英語では完全に訳せない文学タイプの、しかもかなり高度と思われる英語力なのである。ところがもっと恐ろしいことがある。漱石はこの小説で幾度か作中に書き手としての意見を登場させる。列挙すると以下の通りである。

【第六章『しかしただ逢うてただ別れる袖だけの縁ならば、星深き春の夜を、名さえ寂びたる七条に、さして喰い違うほどの必要もあるまい。小説は自然を彫琢する。自然その物は小説にはならぬ』【第八章『この作者は趣なき会話を嫌う。猜疑不和の暗き世界に、一点の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流ではない』そして美しい物の表現を挟み、二人の対話に戻る時、『…少なくとも前段より趣がなくてはならぬ』【第九章『自分の世界が二つに割れて、割れた世界が各自（てんで）に働き出すと苦しい矛盾が起る。多くの小説はこの矛盾を得意に描く。小夜子の世界は…劈痕（ひび）が入った。あとは割れるばかりである。小説はこれから始まる。これから小説を始める人の生活ほど気の毒なものはない』【第十章『謎の女のいう事は次第に湿気を帯びて来る。世に疲れたる筆はこの湿気を嫌う。辛うじて謎の女の謎をここまで叙し来った時、筆は、一歩も前へ進む事が厭だという。…日のあたる別世界に入ってこの湿気を払わねばならぬ』【第十一章『運命は丸い池を作る。池を回るものはどこかで落ち合わねばならぬ。落ち合って知らぬ顔で行くものは幸である。人の海の湧き返る倫敦で、朝な夕なに回り合わんと心掛ける甲斐もなく、眼を皿に、足を棒に、尋ねあぐんだ当人は、ただ一重の壁に遮られて隣りの家に煤けた空を眺めている。それでも逢えぬ、一生逢えぬ、骨が舎利になって、墓に草が生えるまで逢う事が出来ぬかも知れぬと書いた人がある』【第十六章『叙述の筆は甲野の書斎を去って、宗近の家庭に入る』という具合である。

作中に作者自身を何度も登場させるのは小説法のタブーだそうである。実際漱石は膨大な内容を込めすぎて制御が苦しくなっていたのは事実だろう。だが方程式にまでして文学論を成した人が、タブーを重ねて犯したとは思えない。ふとこれは当世文壇に対する「美しさが基本である小説とはこのように書くものだ」「文学とはこういうものだ」という見本提示と、シェイクスピアのような戯曲の記述法—場面展開時の説明挿入—の施行ではないかと思う。それも「力が入り過ぎた」部分といえる。(2013.10.11)